

MUSEUM

2006Winter

EYES

ミュージアム・アイズ

Vol. **43**

Mm
MEIJI UNIVERSITY
MUSEUM

◎ **藤野正治氏** (明治大学博物館
友の会会長)
インタビュー

- ◎ 収蔵室から
- ◎ M2カタログ
- ◎ 来た・見た・聞いた明治大学博物館
- ◎ 博物館友の会から
友の会分科会③ “工芸の会”



磨製石斧と鹿角製ソケット
L=89mm (スイス新石器時代)

考古部門の前身である考古学陳列館時代に、
スイスのベルン歴史博物館から寄贈されたひと品。
海外博物館との交流を物語る。「湖上住居遺跡」
の一つから出土。鹿角を加工したソケットは、見
事に形作られた磨製石斧を柄につける部品。
考古コレクション展として常設展示室で展示中
(06年1月31日まで)。

特集

〜友の会活動の今・昔を語る〜
新生！明治大学博物館友の会

明治大学博物館

新生 明治大学博物館 友の会

～友の会活動の今・昔を語る～



2003年9月28日 長野県井戸尻遺跡にて

博物館にとって友の会とは何でしょうか。そして、友の会にとって博物館とは。館の成り立ちによって、様々な友の会のかたちがあるでしょう。明治大学博物館は、大学の個性を反映した教育・研究資源をもとに、様々な活動をとらして「大学博物館」としてのあり方を示していこうとしています。

そのなかで、明治大学博物館友の会は、「広く社会に開かれた大学」の理念を先取りしていた存在といえることができます。そしてこのことが、ひいては大学の個性ともなる。友の会には新しい「大学博物館」像の可能性が秘められているのではないのでしょうか。

「明治大学博物館友の会」のあゆみ

1987. 第1回博物館公開講座「考古学ゼミナール」スタート

1988. 6,25 受講生の有志から「明治大学考古学博物館友の会」が発足 会員数は150名

初代会長は平吉平氏、顧問に大塚初重文学部教授(当時)・倉田公裕文学部教授(当時)が就任

その後、講演会「日本考古学」シリーズや遺跡見学会など、いまにつづく個性的な活動を展開
会員数も右肩上がりに増加

1992. 第2代会長に土屋哲旺氏が就任

1996. 10~11 第20回博物館公開講座「考古学ゼミナール」

『市民が語る考古学』で会員の研究発表が行われる

会員数が400名に達する

この頃、考古学博物館図書室管理ボランティアが発足

1998. 4 館蔵鏡の内行花文鏡をモチーフとした、友の会シンボルマークが完成

考古学博物館展示解説ボランティアが発足



第1回「考古学ゼミナール」風景(1987年)
ここから考古学博物館友の会が生まれた



考古学博物館友の会
発足記念パーティーの一幕(1988年)



第20回を迎えた「考古学ゼミナール」風景(1996年)
2006年度開催で40回を迎える

A history of "Mm Friends"

1998. 11 『明治大学考古学博物館友の会創立10周年記念文集』を刊行

2000. 4 第3代会長に藤野正治氏が就任

2001. 11 第30回博物館公開講座「考古学ゼミナール」を開講

2004. 4 アカデミーコモンに明治大学博物館リニューアル

2004. 5 考古学・刑事・商品三博物館の統合をうけて新生「明治大学博物館友の会」が発足

友の会活動が考古・刑事・商品の三部門を反映した活動に発展

新生 友の会 活動を紹介します

友の会活動は、会員の自主的な運営の下で、自由に企画立案されています。活動は、なによりも会員の生涯学習に役立つよう計画されています。また、博物館への協力は、会発足当時の伝統ですが、いまでは恒常的に図書室管理ボランティアや展示解説ボランティアの体制が整い、明大博物館がもつ個性の重要な要素となって内外から注目されています。

遺跡・史跡めぐり見学会

遺跡見学でまわった遺跡の数をかぞえることはもはやできません。教員・学芸員が同行し、また現地の研究者にも話しを伺うことができます。新生友の会では、刑事部門と商品部門に関連する史跡や仕事を訪れる、新しい見学会も企画されています。



長野県廣山遺跡での縄文バーベキュー
長和町立黒耀石体験ミュージアム(2005年9月4日)



「世界の黒耀石展」の見学(2005年9月4日)
長野県小県郡長和町 明治大学黒耀石研究センター

ボランティア活動

考古学博物館時代に始まった展示解説ボランティアは、新生友の会では刑事部門・商品部門に活動の幅が広がりました。解説は、もはや堂々たるものです。また、特別展「江戸時代の大名」では、友の会ボランティアと学生ボランティアとの交流も進んでいます。

刊行物

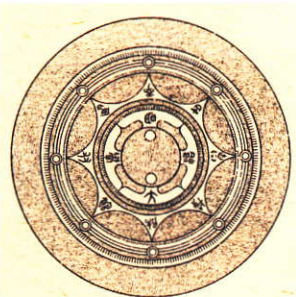
年4回の会報では、博物館情報、友の会行事予定のほか、会員・学芸員による読み物も充実しています。また、1988年以来、毎年開催される講演会「日本考古学」シリーズは、冊子となって刊行されます。

「明治大学考古学博物館友の会会報 創刊号」
1988年9月12日発行

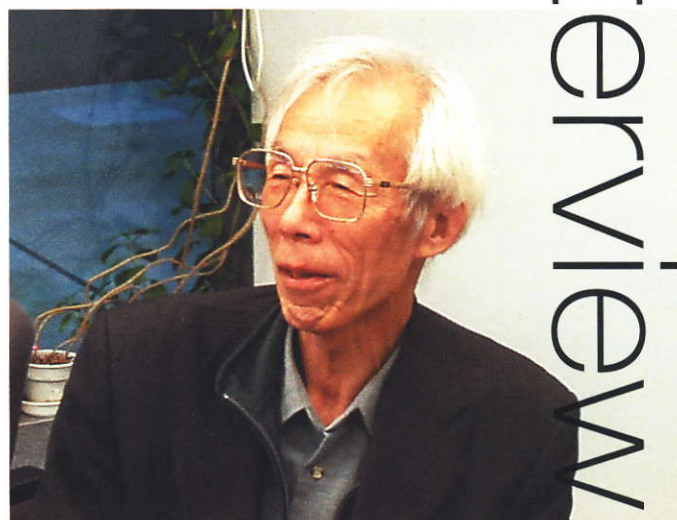


友の会 会長にきく

明大博物館
友の会の今・昔



友の会
シンボルマーク



友の会会長 藤野正治さん

Interview

18年目を迎えた友の会ですが、 なにが友の会を支えてきたのでしょうか?

1988年の創設以来、友の会が長期にわたって活動しつづけているまどまりの秘訣は、「熱心な会員」に恵まれたことが第一に挙げられます。会員による自主的な活動が行われることで、自分達の会であるという強い意識が育まれ、さらに会員が積極的になるという効果があったのではないのでしょうか。活動そのものを誇りに思っている会員も多く、アクティブな活動を楽しんでいます。「ぶら下がり会員」ではなく、「アクティブな会員」でありたいという意識が全体に定着しています。

第二に、熱心な会員それぞれが積極的に参加してきたことに加え、この活動に対して博物館の全面的なバックアップがあったことが挙げられます。友の会が「館製」ではない分、試行錯誤が続きました。これを支援してくれる博物館と会員が両輪となって活動してきたことが、今の友の会を支えていると思います。

友の会活動の特色を教えてください

遺跡見学会の催しは、学んだことをフィールドワーク化する効果があります。自主的な学習内容をお互いに交換し合い、共同でさらに深めることができました。現在、おのおのの学問的関心にしたがって複数の分科会・研究会が設けられてそれぞれの専門を深めています。見学会が交流の場となってお互いの勉強内容が交換されていきました。

積極的に館への協力が行われていることも特色の一つです。図書室や特別展の受付などを通じて館の業務にも携わっています。考古学博物館時代には、展示解説員の方々はその経験を活かして、特別展のキャプション・配布プリントの作成に協力して、自らの勉強になりましたし、博物館への協力にもなりました。

他館の友の会やボランティア団体との 連携をお考えですか?

先日行われた弥生時代のAMS年代を巡るシンポジウムのように、情報交換の場を設けることが必要だと思っています。会報の交換

などからはじめ、すでにいくつかの博物館からオファーがありました。「友の会ネットワークの構築」を必要と考え、「萩ボランティアメッセ」のようなお互いを知り合うチャンスを設けたいと思っています。「外に向けた活動」を行うことで、一つの友の会ではできないことが実現するかもしれませんし、みんなで何かできるかもしれません。

友の会にとっての課題とはなんなのでしょうか?

会員向けのアンケートを実施し、活動へのフィードバックに役立てています。現在、母体が「考古学博物館友の会」であったためにどうしても考古学が中心になってしまいがちです。活動分野を広げたいとの願いは各分科会会員にも強く、他の分野の良さを知ってほしいとそれぞれが願っています。会員を広く集め、会員の裾野を広げたいと思っています。新会員を募ることで分野が広がり、友の会活動そのものにも幅ができます。

長い友の会活動を通じ、会員の高齢化問題もあげられるでしょう。大学の附属博物館なのだから、学生の参加を望んでいます。明治大学の学生に限らず、他大学の学生の参加も盛り込んでいきたいです。

現在、生涯学習の機会が増えておりパティナーアカデミーなど様々な団体があります。「友の会に入っていて良かった」と思えるように「友の会に入るメリット」を、精選されたプログラムの作成を通じて還元していきたいと思っています。

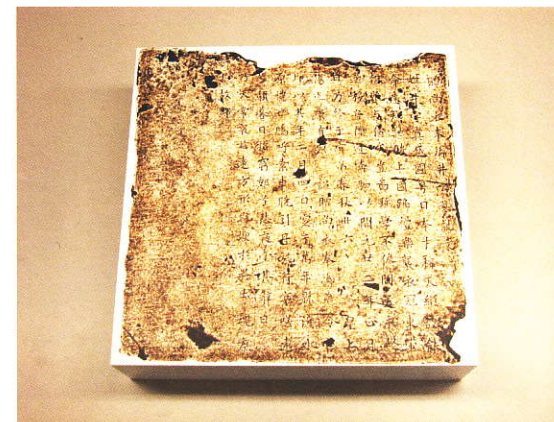
これからの友の会の夢はなんなのでしょうか?

2004年の3館統合以来、分野が増えて友の会活動も活性化し会員数の増加がありました。「勉強は自分のためでもあり、その成果は社会に還元できる」という意図から、現在の分科会・研究会の報告会を設けて広く社会に伝える場を作りたいと思っています。ゆくゆくはこれらを研究発表会という形にしたいと思っています。研究が深まり、友の会主催の特別展・企画展が催せたらという夢を持っています。

遣唐使留学生「井真成」 墓誌のレプリカが寄贈されました

2005年9月に閉幕した愛知万博で展示公開された、遣唐使留学生「井真成」(いまなり、せいしんせいなど読みは諸説ある)墓誌のレプリカが、このたび関係者の御厚意により明治大学博物館に寄贈されました。学問を志して中国に渡り、日本に帰ることなく西安の地で亡くなった井真成について記すその墓誌には、

「国号日本」の文字も明瞭に刻まれ、8世紀の段階で日本という国号を用いていたことを示す、日中交流史を物語る一級の資料です。今回の寄贈を記念して、東京文化財ウイークの期間を含む11月3日(木)～11月14日(月)の間、常設展示室の「明大コレクション」コーナーにおいて速報展示を行いました。



「井真成」墓誌の身部分



「井真成」墓誌の蓋部分

ボランティアが大活躍! ～「江戸時代の大名」展～



展示の説明をする学生解説員(右)

昨年開催した「江戸時代の大名」展(会期:10月15日から12月11日)では、博物館友の会会員有志と本学学生から構成されたボランティアスタッフが受付と展示解説員として大活躍しました。お客様との交流も自然に生まれ、展示が良く分かった、受付の対応が良かったetc...好評の声を頂きました。解説員として活動した本学三年生村島さんは「初めは緊

張して申し込まなければよかったなんて思ったけど、今はとっても楽しくて、本当にやって良かったと思っています。お客さんとお話したり、学生の解説員同士で仲良くなったり、友の会の方に色々教えてもらったり、世界が広がりました。」と話してくれました。

博物館来館者5万人達成!



杉原重夫館長と「キャンベルタウン市青少年使節団」の皆さん

おかげさまで、2004年4月1日のリニューアル・オープンからの総来館者数が、今年の9月30日に5万人に到達しました。栄えある5万人目の来館者となったのは、はるばるオーストラリアから来日中の「キャンベルタウン市青少年使節団」の皆さんでした。皆さんには杉原重夫館長から記念品としてミュージアムグッズが贈呈されました。

来館者3万人達成が今年の3月でしたので、約半年で2万人の方にご利用いただいたこととなります。こうした多くの方々の意見を取り入れて、より一層魅力ある博物館作りに努力したいと思います。

青銅鼎

S E I D O T E I



(中国・西周代)

考古部門の収蔵品のうち、発掘調査で得られた資料については考古学講座の研究を反映して、日本の旧石器・縄文・弥生・古墳時代にかけてのものが多くを占めています。一方で、考古学陳列館設立当初から50年以上かけて収集されてきた寄贈あるいは購入資料は、約520点に及び、その範囲も国内のみならず海外のさまざまな時代にわたっています。今回はそうした海外の資料の中から、古代中国の青銅器の一つである鼎をご紹介します。

青銅とは銅と錫(すず)の合金です。銅と錫を混ぜると硬度が増し融点も低くなるために溶かしやすくなり、加工も容易になります。中国では殷代以降に青銅器が発達し、およそ紀元前2000年頃から中国は青銅器時代に入りました。用途としては、武器、通貨、器などあらゆるものがあり、特に儀式用の「礼器」として多く用いられました。

今回ご紹介するのは、その礼器として用いられた鼎(「かなえ」または「てい」)です。鼎は下から火をあてて、供献用の料理を作る際に使用した三本の足のつく取手付の鍋で、中国では新石器時代から土製のものが発達しました。青銅の鼎は二里頭期(紀元前2000年)にすでに現れ、殷代後期(紀元前1400年)になるまでは装飾性が低く、煤がつく例が多いことから実用的なものとして用いられていました。殷代後期になると装飾が重要視され、全体に文様を飾るものも現れます。もっとも鼎が生産された西周にかけてのこの時期が、鼎の最盛期とされています。

写真の資料は、購入品番号A-86の鼎です。鉢部の口径は25.9cmで、最大厚は0.4cm、口縁部には高さ5.5cm、厚さ1.5cmの太い取手が付き、脚部を含めた総高は25.6cm、重さは4.8kgにもなります。器面全体に装飾が施され、突線を境にして約1:2ほどの割合で上下二段の文様帯が構成されています。どちらにも想像上の動物をモチーフとした魔除けの役割をもつ「饗養(とうてつ)文」

が描かれています。幅の狭い上部の文様帯には、目玉状の図柄が中央に描かれた体の形状が不明瞭な文様が施され、一部乱れもありますが目玉状の図柄の配置を上下逆転させて交互に12個並べています。底にまでわたる下部の文様帯は、くちばしをもつ横向きの像が向かい合ったものが6セットめぐります。下部の文様は、上部と違い乱れがなく非常に規則的な配置を守っています。また、文様は基本的に凹凸がみられないため、塗彩によって描かれている可能性があります。線を彫り込み立体的に表現している部分が7割程度みられます。加えて、器の内側には十数字の文字が刻まれていることや、底部には煤のあとが残っていないことから、実用的なものではなかったとみられます。

この資料は、文様が簡素なものに退化していること、器身の深さと把手と足の形状などの特徴から、春秋戦国時代よりも前の西周時代の鼎であると考えられます。このような古代中国の青銅器は、当時の鑄造技術の高さ、また祭祀のありかたを知ることで資料として非常に重要であるといえます。

(佐藤剛大)

M2カタログ

M2 goods ミュージアムショップ「エムツー」で販売しているグッズを紹介するこのコーナー。第5弾はキーホルダーをご紹介します。刑事部門の「ニュルンベルクの鉄の処女」をモチーフに作られたキーホルダーです。日本国内でこの「鉄の処女」を見られるのは当館のみなので、鉄の処女キーホルダーを入手できるもの(おそらく)当館のみ!来館記念に、このレアなグッズをぜひどうぞ。考古部門で展示されている「遮光器土偶」のキーホルダーもあります。どんなモノかは…ミュージアムショップに行ってみてください。

1位 特別展「江戸時代の大名」図録	1,500円
2位 常設展示案内ガイドブック	800円
3位 明治大学刑事博物館資料 第18集	1,000円



(価格 各850円)

メディア掲載一覧

資料写真掲載

- 資料掲載【海陸返り咲ことはの手拍子】【五十三次ねむりの合の手】
【午ノとし十二月より東京行日記】
『近世の女旅日記事典』東京堂出版
- 資料掲載【城州於伏見戦争之図(慶応4年正月)】
『週刊 日本の合戦』第25号「徳川慶喜と鳥羽・伏見の戦い」講談社
- 資料掲載【「武家諸法度」(寛文3年)】
『史学会シンポジウム叢書 近世法の再検討』山川出版社
- 資料掲載【其二東京府京橋之図】
佐々木克 『岩倉具視』(シリーズ幕末維新の個性) 吉川弘文館
- 資料掲載【三味塚古墳主体部写真(茨城県三味塚古墳)】
【舟塚古墳調査写真(茨城県舟塚古墳)】
『玉里村史』玉里村教育委員会
- 資料掲載【丸橋忠弥捕縛の図】【名和コレクション 捕縛】
【『徳川幕府刑事図譜』捕縛の図(凶悪犯のはしご捕り)】
【『徳川幕府刑事図譜』捕縛の図(打ち込み・寄り棒・釣縄の使用法)】
【突棒・刺又・袖搦】【御用提灯 南町奉行所】【呼子笛(紫檀製)】
【寄棒】【打込】【捕者関係錦絵「仮名手本忠臣蔵」】【目潰し器】
【乳切木】【鉢鉄】【角手】
歴史群像シリーズ『日本武器集成』学習研究社
- 資料掲載【ナイフ形石器(群馬県岩宿遺跡)】▶写真
『ニューワイドずかん百科 日本の歴史』学習研究社
- 資料掲載【素文壺形土器(福岡県板付遺跡)】
山中光一 『文学史を考える—マクロアプローチャー—』名著出版
- 資料掲載【御成敗式目】
日本の歴史を見る 第3巻『源平争乱と鎌倉武士』世界文化社
- 資料掲載【木製農具(静岡県登呂遺跡)】
高田俊男 文庫判『服装の歴史』中央公論新社
- 資料掲載【「内藤家文書」江戸幕府老中連署奉書 覚(由井正雪人相書)・覚(金井半兵衛人相書)】
児玉幸多 改訂『日本の歴史』16巻 中央公論新社
- 資料掲載【尖頭器(群馬県武井遺跡)】【細石刃(新潟県荒屋遺跡)】
【ナイフ形石器(東京都茂呂遺跡)】
『週刊 ビジュアル日本の歴史(増補版)』第101号 デアゴスティーニ・ジャパン
- 資料掲載【壺に入った成人骨(千葉県天神前遺跡)】
(ドイツ展記念概説)『日本の考古学』(上・下二巻) 学生社
- 資料掲載【近世史略薩州屋敷焼撃之図】
『日本この100人 11号・西郷隆盛』デアゴスティーニ・ジャパン
- 資料掲載【甲州法度之次第】
『日本この100人 12号・武田信玄』デアゴスティーニ・ジャパン

- 資料放映【伏見関口豊後橋進撃之図(慶応4年正月)】
日本テレビ「午後はおもいっきりテレビ」内「きょうは何の日」コーナー
「会津若松城が開城した日」 2005年9月22日
- 資料放映【株仲間鑑札】
NHK教育テレビ NHK高校講座・日本史
第24回「幕政改革を見直す〜田沼意次とその時代〜」
2005年10月11日、13日
- 資料放映【株仲間鑑札】
NHK教育テレビ「10min.ボックス:『日本史・江戸時代(2)』」
2005年10月24日、31日



館紹介等の取材・撮影・掲載 (新聞・雑誌・テレビ)

- ◇掲載【明治大学博物館紹介】
学研「キッズネット」(<http://kids.gakken.co.jp/index.html>)
学習研究社
- ◇掲載【明治大学博物館紹介】
『PLUS』13号 PLUS出版委員会
- ◇放映【友の会解説ボランティア紹介】
KBSテレビ(韓国放送)『KBS 2TV 世の中の朝』
2005年10月31日~11月4日
- ◇掲載【明治大学博物館紹介】
『蔵前工業会誌(Kuramae Journal)』2005年11月・12月号
蔵前工業会
- ◇掲載【明治大学博物館紹介】
『東京生活』2005 no.009 樺出版社
- ◇放映【明治大学博物館紹介】
アイビーシーワールド「IPC REPORTER」
(スカイパーフェクTV! 333チャンネルにて放送)

団体見学の記録 2005年9月~2005年11月

- 【一般】 明治高等学校・中学校PTA98名・埼のくにいきがい大学22期校友会15名・浦和高年大学校友会史跡めぐり部20名・桔梗会30名・文京区教育委員会 生涯学習部文化振興課75名・所沢市高齢者大学 在学生1班11名・私立大学庶務課長会90名・越谷市役所総務部 職員研修室10名・東京四季散歩会15名・千代田区立富士見福祉会館10名・綾瀬中学校教育研究会人権教育部会4名・歴史散歩の会23名・明治大学石川県父母会15名・関東六合クラブ12名・筑紫古代文化研究会16名・習志野市民カレッジ1期会28名・すみだ郷土文化資料館ボランティアの会10名
- 【小・中学校】 明治学院中学校60名・明治大学付属中野中学校186名・明治大学付属明治中学校165名・千葉県匝瑳郡野栄町立野栄中学校22名・明治大学付属明治中学校3年生40名・品川区立城南中学校38名・青森県三沢市立第五中学校3名
- 【高等学校】 中野西高等学校29名・福岡県立鞍手高等学校116名・東京都立高島高等学校7名・群馬県立高崎東高等学校43名・横浜市立みなと総合高等学校6名
- 【大学・大学院】 明治大学経営学部 薩摩ゼミ16名・法政大学大学院 日本史学専攻近代史ゼミ7名・明治大学商学部 高川清明ゼミナール30名

博物館 友の会から

友の会分科会③ “工芸の会”

私たちの身の回りにはいろいろな品物があります。例えば、食卓には様々な皿小鉢が並べられています。その多くは何時、どこで買われたものか、定かではありませんが、中には思い出される食器もあります。例えば「飯茶碗は岐阜県的美濃焼で、土岐の陶器市で買ったものでした。皿は愛媛県の砥部焼で商業センターのお土産で、食後のお茶は鹿児島県の薩摩焼で飲みました」というように。

このように皆様の家庭でもいろいろな地方の陶磁器が、それと知られずに毎日使われていることでしょう。このように食器にかぎらず、家具、日用品、衣類、飾り物そ

れぞれに名も知られぬ職人さんの真心をこめた品物に囲まれて、私たちは生活しております。これは何時、どのようにしてわが家に来たのでしょうか。これを考えて使うだけでも楽しいものではないでしょうか。私たち『工芸の会』ではこのような身近にあるさまざまな品物、手工芸品について勉強しております。しかし工芸品の範囲は多岐にわたり、例年9月に三越で開催されている『日本伝統工芸展』でも、陶芸、染織、金工、木竹工、人形、諸工芸とあり、とても私たちの手におえるものではありません。しかし会員それぞれの分野について実践また勉強されたことをお互いに話し合い、また研鑽に勤めております。

『工芸の会』のモットーは実物に即して学ぶことです。これには明治大学博物館の所藏品または会員の持ち物を持ち寄って行っております。更に、美術館、博物館、製作現場なども訪問し、専門家の話を聞く機会を作っており、昨年の11月にはカガミクリスタルの工場を見学いたしました。

『工芸の会』は、実物を知り、その枝、ルーツを学び、日々の暮らしをより豊かにしようとする会です。例会は毎月第2木曜日、午後1時30分より約2時間、博物館の教室で勉強会を開催しております。ご興味のある方々の参加を歓迎いたします。

(工芸の会 鶴田博)

【博物館友の会 連絡先】

〒101-8301 千代田区神田駿河台1-1
 明治大学博物館 友の会宛

博物館案内

【開館情報】

開館時間 10:00～16:30(入館16:00まで)

休館日 夏期休業日(8/10～8/16)
 冬季休業日(12/26～1/7)
 8月の土・日に臨時休館があります。

※開館時間・休館日には変更場合があります。

観覧料 常設展無料
 特別展は有料の場合があります。

【図書室ご利用案内】

開室時間 月・金 10:00～18:30
 (8、9、2、3月は10:00～16:30)
 火～木 10:00～16:30
 土 10:00～12:30

閉室日 日曜・祝日・大学が定める休日

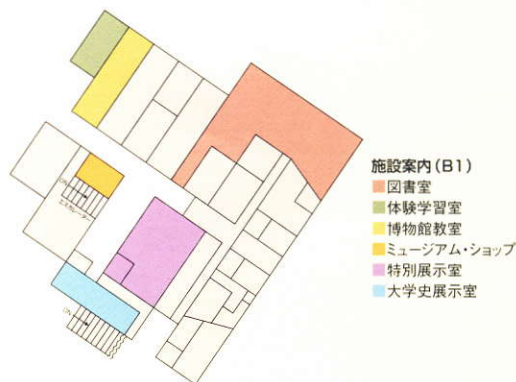
※図書室はどなたでもご利用いただけます。

※蔵書は原則閲覧・コピーのみとなりますのでご了承ください。



交通機関

JR御茶ノ水駅(中央線)から徒歩5分
 地下鉄御茶ノ水駅(丸の内線)から徒歩8分
 地下鉄新御茶ノ水駅(千代田線)から徒歩8分
 地下鉄神保町駅(都営新宿線・半蔵門線)から徒歩10分



施設案内(B1)

図書室
 体験学習室
 博物館教室
 ミュージアム・ショップ
 特別展示室
 大学史展示室